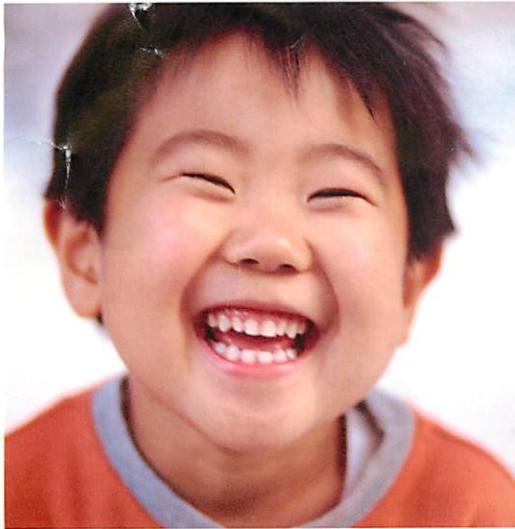
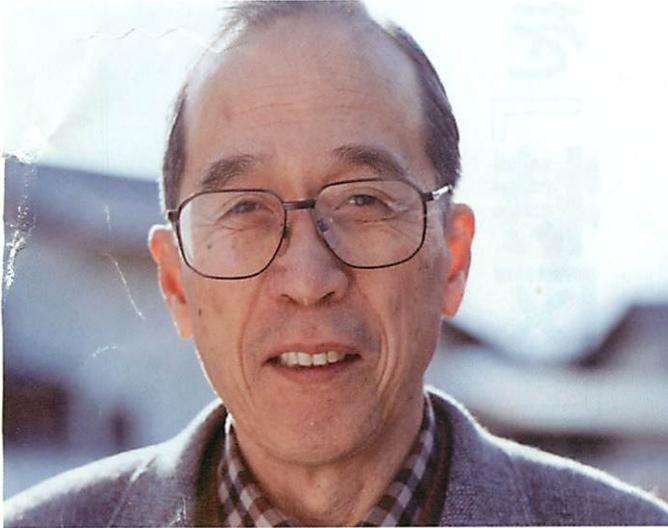


メンズ”

あいあう

第四号

4



寄稿1/ 奇人・変人の受け入れられる街

釜ヶ崎を『特区』にして残したい 水野 阿修羅

探訪レポート/ おやじの会 ~男たちのつながりを地域に~

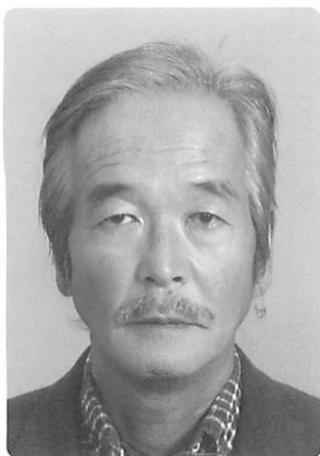
寄稿2/ 母の介護と男であること 林 弘幹

報告/ 男女両性で形づくる教団をめざす協議会

エッセイ/ 女のささやき 鎌田 拓子 男のつぶやき 鷹橋 賢淳

奇人・変人の受け入れられる街

釜ヶ崎を『特区』にして残したい



メンズサポートルームスタッフ
水野 阿修羅

Mizuno Ashura

私は一九七〇年、大阪万博のあった年に、大阪、西成、釜ヶ崎にやってきた。釜ヶ崎に行けば、仕事がいくらでもあると聞いたからだ。万博工事は終わっていたが、万博会場を中心に千里ニュータウンの工事や泉北ニュータウンの町づくり工事がさかんに行なわれていた。釜ヶ崎では、万博工事に労働者が大量にいると、ドヤ（簡易旅館）が建てかえられ、大部屋がなくなり、個室のドヤがどん

どんでき、収容人数が二万人を越すようになった。国も財界も、釜ヶ崎を労働者供給の一大プールとして考え、巨大な「あいりん総合センター」を建てた年である。一方で、まだ戦後の混乱期にできた、不法占拠バラック住宅もまだまだ残っていた。街には子どもがいっぱいおり、女性も多かった。第三世界にいっぱいある「スラム」という感じだった。

この時代のあいりん総合センターでの求人
の中心は、建設業ではなく、新日鉄や日立造
船、大阪ガス、三井東庄といった大手製造業
への『派遣』だった。そして次に港湾荷役。
その次が建設業だった。

一九七三年のオイルショックとそれに続く
ドルショックは、釜ヶ崎を直撃し、センター
に仕事がこなくなった。暴力手配師追放釜ヶ
崎共闘会議（釜共闘）の闘いが、賃金の上昇、
労働条件の改善・暴力団支配からの脱却と
いったことも関連したかもしれない。

それまでの釜ヶ崎は、一九六一年の第一次
暴動以来、一〇年以上に渡って、夏は『暴動』
のシーズンであった。きっかけはささいなこ
とでも、日頃のたまったうつぶんをはらすべ
く、怒りは警察にむかった。ドヤには冷房も
なく、夕涼みのため、人々は路上にあふれて
いた。

こどもたちも石を投げるといわれ、こども
を街から追い出す作戦がとられた。学校は、
戸籍や住民票がないと入れてくれなかったの
で、二百人以上のこどもが学校にいつていな
かった。

街には『高級婦人アパート』と書かれたア
パートもたくさんあって、子連れ女性たちが
水商売などで働きながらたくさん住んでい
た。（黒岩重吾という作家はこんな女性をいっ

ばい書いている。『西成山王ホテル』など）

行政は、こどものいる家庭に安い公営住宅
を斡旋する方法で、街からこどもをいなくし
た。残ったのは、大人の『男』ばかりだ。男
の割合は五割から九割になった。総数二万人
収容のドヤが『男専用』だったことも関連す
るだろう。一九七〇年代後半のバラック街は
撤去された。

こどもや女性のいなくなった街は、奇人・
変人ばかりが目立つ。裸で踊っている男、大
声で歌っている男、けんかも珍しくない。酒
やギャンブルで失敗し、ヤケになっている男
も多い。

あまりに奇人・変人が多いので、警察も、
余程のことがない限り介入しない。警察が嫌
いな人も多いので、ヘタに介入すると余計も
めることもある。かつてはヤクザが街の治安
をしきっていた時代であった。

こうやって書くともチャクチャな男ばかり
と思われるがそんなことはない。ドヤと呼ば
れた簡易旅館の多くは一畳から三畳、収容人
員は二万人。〇・七平方キロにこの人数であ
る。人口密度日本一。それなのに殺人事件の
比率は少ない。シエルターと呼ばれる大阪市
立の夜間緊急宿泊所は無料で、千人が泊まれ
るが、トラブルが少ない。アルコールが入る
と人格の変わる人も多いが、みんなが慣れて

いるので対応もうまい人が多い。

「男らしさ」に縛られ、成功幻想や暴力志
向の強い男もいる一方で、競争社会を拒否し
た人や、人と仲良くすることが苦手な人や、
一人でいることが好きな男も多い。

今、日本中の町づくりや町おこしが話題に
なっている。この街でも「町づくり」が語ら
れる。その時に、必ず出てくるのが「普通の
町に」という意見だ。ドヤの利用者の多くは、
単身の男なのに、「普通の町」にしたら、客
はいなくなる。何を考えているのだろう。

アメリカで一九八〇年代にホームレスが急
増したのは、「人権」をとる人たちが、
精神病院に入っている軽度の人たちを病院か
ら出したが、家族や地域が受け入れなかった
からだ。

奇人・変人の受け入れられる街がなければ、
ホームレスが増えるだけだ。

奇人・変人の受け入れられる街。排除しな
い街がこの街の魅力である。野宿者たちが始
めた路上の朝市も同様だ。

私は日本中まわってきたが、この街以上に
刺激的な街を知らない。

『奇人・変人特区』『シングル特区』『路上
朝市特区』これがこの街の目指すべきところ
だと思う。





探訪レポート

おやじの会

Report : investigate OYAJI no Kai

～ 男たちのつながりを地域に ～

名古屋教区の乗西寺(鵜飼信孝住職)で
「若水おやじの会」という活動が続けられています。
今回は、その会に参加させていただき
活動の様子をお聞きしました。

Text/女性室スタッフ 本多祐徹 Photo/同スタッフ 土屋慶史

おやじの会の生い立ちについてお聞かせください。

● 鵜飼 わたしが以前PTAの会長をやって、その時に一番思ったのがお父さんの影が薄いということなんです。役員になるのは男の人で自営業とかね、私は寺などで回ってきたんですけど、実際にいろいろとやっているのは女の人でしょ。

私の次を栗本さんという方がやられたんですが、このあたり、今池に場外馬券場を作るという計画がもちあがって、それはちょっと困ると反対の署名運動を始めたんです。そうすると結局男たちは動かなかった、お母さんたちが中心になったんですね。

そこで栗本さんが、学区の中でおやじたちのネットワークを作りたいと、先輩の私のところへ一緒にやってくれんかと来たのがきっかけです。私も教育のことだけでなく、学区のこと地域のこととおやじの顔が見えるようにして行きたいと思っていましたので、それで始めたわけです。もう十二年くらい前かな。

最初は今池あたりの居酒屋に集まったりしていたんですが、お金が続かんですよね。お寺は場所があるので二、三カ月たった頃から第三土曜日の八時からということになり始めました。

どんな活動をされているんですか？

● 鵜飼 サラリーマンとか自営業とかいろんな職業の人がいて、自営業の方で奥さんが看護士さんで夜勤があつたりね、共働きの人もそうですが、洗濯やご飯作ったり当たり前に行っているということが話し合いの中で出てきたりして、刺激されましたね。だから料理も上手いんですよ、いろんな行事のときに買出しをしたりしてね。

初期のころはキャンプに行ったりもしましたが、今は主に地域の活動で年間の行事がすっかりありましてね、年末には地域の子どもたちを対象に「餅つき大会」をしたり、花見の会、公開講演会これは教育の問題が中心ですね。それから小学校のグラウンドを借りて親子ソフトボール大会、親子フットサル大会。それから七月の終わりの土日に、地域の夏祭りですてん焼き

とビールのお店をやったり、最近塩ヤキソバをやったりね。だいたいそこで年間の活動費を儲けるんですよ。親子料理教室では、三菱に勤めている人が、IH調理器を提供し、料理の得意な人が料理長になってスパゲティ教室もしますね。学区の運動会にもおでんの店をやったり、ここ四、五年認知されてきてね(笑)。

どんな人たちが集まってきましたか？

● 鵜飼 初期のころは子どもたちが小学校や中学校へ行っていて、教育のこととか家庭のことなど話合ったりしました。ですが、十何年も経つと子どもたちもみんな成人しましてね、グループというのはどうしても壁ができてしまつて、少しずつ入ってこられたんだけど続かないで。四十代五十代かな、今入っている人たちは。三十代くらいの人が入りにくいのかも知れませんが、仕事もあるし。

や っていらて良かったところは？

●鵜飼 この乗西寺は、昔は栄にあったんです。それが戦争で焼け出されて替地でごつちへ変わったんです。まったく地域の寺ではなくて周りに門徒さんがないんですよ。だから私が思ったのは、先ずいるんな人が寺に来てくださって、そこから始まってやがて本堂に参っていただくとか仏教に興味を持っていたら、そういうつながりができるといいなと。それがPTAの流れからできてきたんです。

嬉しかったのは去年、おやじの会の方から「仏教って何？鵜飼さん一度しゃべってよ」って言われてね。十年たってこういうふうになったんですね。自分が年をとってきて、今度は介護の問題に直面してきたし、自分自身も団塊の世代で定年になって、おやじの会の方からこういうことを言われるようになった。一つの流れかなあ。何十年も会社のために働いてきて、定年になってやはりもう一度今度は社会に向かって何かしたいという、そういうところに「おやじの会」というような場があるというのはいんじゃないかと思う。

男の人って会社や職場でのネットワークはあって

も、地域でのネットワークはほとんどゼロなんです。地域のこと、子どものことは全部女の人に任せてますから、会社から放り出されたら地域のつながりゼロなんです。でもおやじの会をやっていると少しは関係があるから、自分の趣味とかつながっていけるところで地域のために何かできるんじゃないかということにもなるんです。

いろんな趣味の人もいて、例えばコンサートやるときもテレビ局の関係だった人とか、専門家がいて音響は全部セッティングしてくれたりね。医者もいるし、車の専門家、学校の理科の先生もいる。絵の先生もいるからポスターは描いてくれる。その人たちが力を合わせるから、そして料理もね、けっこういいですよ。

今日はどういう予定ですか？

●鵜飼 今日はこの若水中学にイギリスから留学生七人と教師三人の合計十人が三月二十一日から一週間来るんです。最初はこの七月の例会に校長先生が来られて、

学区でホームステイをしたいのでおやじの会も協力してほしいということだったんです。でもやはり同級生の生徒の家庭が一番いいんじゃないか、ということで、結局それは生徒の家庭でということになったんです。ただ、最後のお別れ会をおやじの会で手伝ってくれということになったんです。三月二十六日にお別れ会をやるのでおやじの会は料理をやるのと、歌も歌おうということになっているんです。「おやじバンド」というのがあって、フォークの年代ですね、ギターでイギリスの英語の歌を歌って合唱しようというんです。だから今日は、料理を何作るうかとか、歌をどうしようかということを決めます。それと、年度末ですので来年の総会の日にちと花見の会の日にちを決めるということもあります。



住職さんにお話をうかがっているうちに定刻

になって、おやじの会のメンバーの人たちが一人、また一人と集まってこられました。

事務局担当の森さんが進行する形でさっそく会が始まり、まず、交換留学生とのお別れ会についての相談に、

「それぞれのお家から持ち寄りだけど、前にも少し話してたけど、

まず塩焼きそばがいいかと思うんです。」

「前にバーベキューやったときのセットが寺にあるから。」

バーベキューはどうかなあ。

それから寿司はどうでしょう。」

「何人くらいになるでしょうねえ？」

「塩焼きそばはたくさん作れるし、

肉は五十人分くらいかな？」

「テーブルは四つくらいあればいいか。」

「その頃は花がちょうど咲いているかなあ。」

「休暇とってこんといかんあ。」

「イギリスの人には鶏肉の方がいいか。」

焼き鳥もしょうか。」

話し合いは進み、やがてコンサートの方向に、

「渡辺さん、何か出し物あるんですか？」

「せっかくイギリスから来るんだから、

イギリス民謡を二、三曲選んだんだけど。」

「個人的にはイエスタデイがやりたいな。」

「ビートルズなら中学生でも知ってるでしょう。」

「懐メロ、世代が違うから。(笑)」

「寺でコンサートやると、最後にみんなで

『ふるさと』を歌いましょうって、

そういう感覚だよな。」

『スカポロー・フェア』

サイモン&ガーファンクルの。」

「あと『グリーン・スリープス』とか、

日本名では『殖生の宿』だけだ

『ホームスイートホーム』とか。」

「テンポのいいやつがいいなあ。」

「ロンドン橋渡るうとか？」

「英語にこだわらずにやったらいいんじゃない。」

「おやじバンドでやった『岬めぐり』とか

『遠い世界に』とか？」

「英語でやれば伝わるかと思ったら、

わからんよ。」

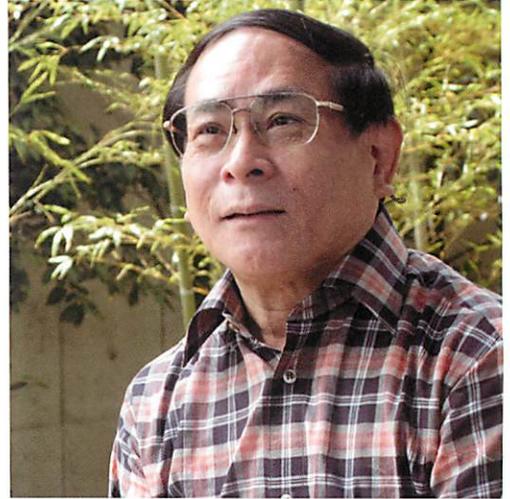
と、話し合いはますます盛り上がっていきました。

一段落して缶ビールがテーブルに並び、活気に満ちたおやじの会の夜はふけていきました。

「若水おやじの会」は、若水学区という地域のPTA活動の中から生まれ、寺という場を拠点として続けられました。

そこには門徒という枠を超えて自由に男性たちが集まり、地域の中で個性を発揮しながら自分の居場所を見出していく、とても楽しい取り組みだと思えます。メンバーのほとんどが所属の門徒ではない人たちですが、活動の中で縁あって門徒になられた方もあるそうです。

いま、多くの団塊の世代が定年を迎え、第二の人生を模索しなければならぬ状況の中で、寺という場の一つの可能性をおやじの会から教えていただいたように思いました。



京都教区 遊林寺住職
教学研究部嘱託研究員

Hayashi Hiroki 林 弘幹

寄稿 ②

母の介護と 男であること

あ 「あんた、ようやるな！」と感心しきりの言葉を発したのは、認知症の母を診てもらっている老年神経内科の医師である。還暦を越えた息子が八十八歳の老いた母を介護している図は、確かに「ようやるな！」と言われる状況かも知れない。

昨年一月二日に母が腸閉塞で緊急入院してまもなく、夜間、廊下を徘徊するので困るという電話がしきりに入るようになり六日後に退院した。その翌朝、認知症だった父が自宅で亡くなった。前夜、うどんが食べたいといったのでインスタントで作った食事は手をつけぬままベッドで座って亡くなっていた。不審死ということで検死があり、たいへんな日となったが、母は「何かあったんか」と言ったきり葬儀にも出なかった。入院する前は母が父の身の回りの世話をしていたが、入院という体験を通して一気に認知症へと進んでいった。その後、要介護二の判定が出

され、一月末には訪問看護師による入浴サービスも始まった。三月からデイケアのサービ
スが始まったが、母はすごい剣幕でお迎えの
人を追い返し、初回に参加したのみで以後今
日までデイケアには行っていない。

現在、昼夜、ベッドで寝ているばかりであ
る。食事は盆にのせてベッドの上に私が運ぶ。
食事が終わり再び寝る。少し詳しくいえば、
私が朝七時に開門する。タイムーを入れてお
いたおかゆがグツグツ音を立てている。朝食
にはまだ早いので八時頃にみそ汁作りに取り
かかる。母は入院したときに入れ歯を全部無
くしたので、柔らかいものを基本にして作る。
食事の直前に蒸しタオルで顔を拭いてもら
う。ここで母の一日が始まる。食事中にポー
タブルトイレに行くことがあるので、お盆を
引くのに四〇分ぐらいかかるときもある。食
器を洗ったあとはポータータブルトイレの掃除
に取りかかる。これでだいたい一〇時頃に終
わる。ただ、午前中にお参りなどがある日は
早目に食事を出す、早く食べてくれないか
と気持ちが悪くこともある。しばらくして昼
食の時間になり、また同じことを繰り返す。
夕食は午後六時に鐘をついた後すぐに取り
かかる。食事が終わって母は寝るわけではな
く、夜間用の食事としてやわらかいパンと果

物を枕元に用意しておく。夜は母の部屋には
小さな明かりをつけ、私は障子で隔てた隣り
の部屋で寝る。私がトイレに行くとき、母の
布団のかかり具合を手でポンと押さえて行
くようにしている。自宅では一度も徘徊は
ない。

このように書いてみると楽なように感じら
れるかもしれないが、住職として急に枕経の
依頼がくることもあり、葬儀を執行するまで
はなかなかたいへんである。母は私の姿が見
えないと不安になりパニックを起こすことが
ある。その場合、決まって入れ歯がない、ご
飯が食べられないと言って騒ぎ、家中、あち
こち探し回る。私も一緒に探し回るが、最後
に「ぼけたのかなあ」と言ってベッドに入る
ということがこれまで二回あった。不安に陥
らないように、外出するときは行き先と帰宅
予定時間を小さな紙にメモして渡す。帰宅が
多少遅くなっても「遅かったんやな」といつ
て時計を見ながらずっと待っていることが
多い。ただ、「私には子どもはいない」とい
う言葉はいつ聞いても悲しくなる。では私は
誰なんだと言いたくなるが、そうですか、と
聞いておくことにしている。妹が時々手伝い
に来てくれるが、母は同じことを言うので、
妹も「私は誰やね」とぼやいている。

介護しながら他の「仕事」をすることはし
んどいものがある。高齢者虐待ということ
耳にするが、そのパターンは老親に対して介
護者の息子が虐待を加えるというケースが多
いと報じられている。気持ちはよくわかる。
介護は時間を待たなければならない、仕事も時間
を待たなければならない。介護に追われると仕事に意
識が集中できないという問題がある。介護は
細切れな時間の連続であり、仕事は集中した
時間を要求される。私は定年後に介護をする
ような状況になったが、在職中なら無理と思
う。ただ私は、長い人生ご苦労さまでした、
私と一緒に生きてきてくれてありがとう、と
いう気持ちで母に接している。今、私が介護
する番が回ってきただけだが、それにつけて
も仕事と介護の両立には厳しいものがある。
「食事の世話や洗濯を男が大変でしょう」と
と言われることがある。女だったらいいのか
なという感じが含まれているように思う。最
近、外国から介護士を派遣してもらう動きが
あるがほとんど女性であり、介護の担い手を
女性に委ねるといふ発想はいかがなものだ
ろうか。性による役割分担ではなく、両性に
よる共生が必要と思う。男性にとっても女性
にとっても生きていてよかった、と感じる社
会が開かれることを如來は願っている。 ■

男女両性で形づくる教団
をめざす協議会

● 昨年度よりおしかけ座談会をはじめた。教区が広範囲なので、講演会などを開催するのではなく、身近な問題を話し合う座談会を教区内の各地で行なっている。ジェンダーという言葉を使わずに、「男らしさ女らしさ」という言葉にどんなことを感じて育ってきたか? ということを参加者の人に問題提起をしてみたら座談会ももった。

● 集まってもらうのでなく、おしかけていく。各部門(推進員、育成員、坊守会、若坊守会など)の学習会などに出かけていって一緒に座談会をしている。

● 教区の事業に関わっている人は限られていて、同じ人が複数の部会を兼ねている現状。組へ出かけていくことで課題の共有を図っている。出て行くと(靖国問題や部落差別問題などに)反発もある。講義形式ではなく、ジェンダーかるた等をやりながら一緒に話し合う方法を考えている。

〈教区の機関について〉

● 教区の教化委員会には坊守会の役員が充て職で入るのみである。多くの女性が参画できるように改善していく必要がある。

● 「男女両性で形づくる教団」ということはどういうイメージなのか。例えば教化委員の男女の比率などを提起するなどして、課題を共有していきたい。

● 坊守さん若坊守さんに委員会への参加を呼びかけても、家族の協力・理解が得られないために、坊守さん自身も速慮してしまっているという状況を何とかしたい。

各教区からの報告

〈組との連携〉

各教区の取り組み

● 奥羽〈男女共同参画推進委員会〉

- 公開講座 2009年3月25日
テーマ「セクシュアルハラスメントについて」
講師 井上摩耶子さん(ウィメンズカウンセリング京都所長)
- 機関紙「ひと、ひとり、ひとびと」発行(第3号発行)

● 仙台〈女性小委員会〉

- 教化委員会研修会 2009年4月11日
新谷のり子コンサート
- 第3回 平座で話そう! 押しかけ座談会 2009年5月21日

● 三条〈企画委員会〉

- 2008年度 実施せず

● 高田〈えん(緑・円・炎)の会〉

- 社会問題研修会公開講座 2009年5月23日
テーマ「男と女とのつながりの中から
— 恵信尼と親鸞の生き方に学ぶ—」
講師 今井雅晴さん(筑波大学名誉教授)
- 規則作成作業

● 富山〈あいあう会〉

- 定例会 隔月開催
「おーい父親」輪読会(11月まで)
「ジェンダーかるた(静岡 製作)で話し合う」(1月、3月)
- 北陸連区差別問題研修会
2009年5月14から15日の開催準備と参加
テーマ「戦争と性」
講師 園田久子さん・宋 連球さん(晋山学院大学教授)

● 金沢〈男女共同参画推進小委員会〉

- 研修会① 2009年3月17日
テーマ「〇〇らしさからの脱出」
講師 味沢道明さん(メンズカウンセリング)
- 研修会② 2009年6月18日
テーマ「女性住職泣いて笑って今を語る」
講師 西村通子さん 浄土真宗本願寺派住職
- ザ・座談 年に3回実施

● 福井〈社会教化小委員会〉

- 2008年度(休止) 今後の活動について協議中

● 高山〈組織拡充小委員会〉

- 2008年度(休止)・2009年度(休止)

● 名古屋〈組織強化部門〉

- 女性研修(年3回2008年最終年度)
テーマ「宗祖親鸞聖人に学ぶ」 講師 四衛亮さん

● 大阪〈男女の平等参画を考える実行委員会〉

- 委員会 年間7回実施
テーマ「近代の女性史に学ぶ」
学習会、フィールドワークなど

● 山陽〈男女共同参画推進委員会〉

- 委員会 年4回実施
- 公開研修会 2009年5月21日(インフルエンザにて中止)

● 四国〈男女共同参画班〉

- 公開講座 2009年1月22日
テーマ「男女平等参画への願い」 講師 草野龍子さん
- 公開講座 2009年5月11日
テーマ「真宗の教化の課題としての男女共同参画」
講師 土屋慶史さん

● 日豊〈時代社会部門〉

- テーマ「真宗の解放論」
(社会問題講座)
- 出張講座(年6回実施)
テーマ①真宗門徒の靖国問題②男女共同参画の教団づくり
委員が教区や組の研修会へ出向し、問題提起。
- 公開学習会 2009年5月15日
テーマ「中世親鸞の時代における国家と仏教」・「仏教と女性」
講師 平雅行さん(大阪大学教授)
- (男女問題研修)
- 公開学習会(年7回実施)
テーマ①真宗門徒の靖国問題②男女共同参画の教団づくり

● 久留米〈男なり女なり委員会〉

- 部会テーマ「これからのお寺—男と女の視点から」
- 公開学習会 2009年5月1日
テーマ「近世、遊所の女たち」 講師 中村久子さん
テーマ「性の国家管理」 講師 園田久子さん
- 組巡回(久留米組) 2009年5月23日
かるた取り「ジェンダーかるた」
近代女性史(坊守制度)



女性室公開講座 日豊会場の報告 日豊教区の取り組み

テーマ

私たちの生きせき近代にタイムトラベル
〜 本当の生き方を見失わないために 〜

〈開催日 2008年5月15日〉

日豊教区 日野敦子

〈これまでの取り組み〉

日豊教区では女性室開設の三年前から園田久子さんや森崎和江さん、伊藤公雄さんなどに来てもらい、学習会を開いてきた。坊守制度の問題への取り組みの他、毎年女性室との交流を行なっている。そして、前年度は本誌第十九号に掲載された「女性会議」での講義抄録「近代史における宗門の女性史」をテキストにして学習した。

〈女性室公開講座〉

公開講座を実施するにあたり、男女の問題を難解にしないようにという視点から、それぞれが日ごろ感じている性差別の課題などを句にして持ち寄り、ジェンダーかるたを作成した。当日は、わかりやすくするため、プロジェクターで読み札を大きく写してマイクで読み上げ、グループごとにかかるた取りを体験した。山内小夜子さんの講義に先立ち、資料を基にシナリオを製作し、衣装なども手作りの寸劇を上演した。

〈公開講座を終えて〉

各自の得意な分野で参画することができ、かるたを作ったりするうちに自分たちの勉強ができた。また、坊守会との共催はできたが、他の部門との連携は難しかった事から統括する部門が必要だと思った。

一人ひとりの思いと伝えたいことをしっかりと把握して、時間内に凝縮するのは大変だったが、シナリオ作りやジェンダーかるた作りなど形に残していくことは楽しい取り組みであった。





2008.10.3 Report of Conference
**男女両性で形づくる教団
 をめざす協議会**

若者のセクシユアル・ヘルスの 活動紹介

関西セクシユアルヘルス・ユースネットワーク
 事務局長 **清水誓子**



青少年を取り巻く愛と性についての正確な教育が、家庭や学校においてなされてこなかったため、様々な性に対する思い込みや無知がデートDVやレイプ、妊娠・中絶や性病にいたるまで、いたましい現実を生みだしているという。
 愛と性にまつわる青少年の課題を受け止め、ジェンダーに関する思い込みを解消するワークショップ(体験学習)などを、各寺院や教区、本山でも青少年教化の現場で導入する必要性があるのではないかと、この提案がプロジェクトを用いた映像によって行なわれた。

2008.10.3 Report of Conference
**男女両性で形づくる教団
 をめざす協議会**

全体協議

The General Conference

この時間は女性室と教区との課題の共有を図るためのものとし、話し合いが進められた。

- 各教区の男女共同参画に関する委員会規則を資料として女性室にそろえて欲しい。
- 組織の中で性差別問題は「やらなければならぬ問題」として捉えられている。自分が問われているという視点をもつことが大事だと思う。
- 公開講座をやっていない教区への働きかけが必要。
- 女性住職が抱える様々な問題を語る場がない。
- ↓ 女性住職対象の研修を企画中。
- 「男女両性で形づくる御遠忌」を具体的に表現していきたい。
- ジェンダーかるたを完成してほしい。
- ↓ 企画中。
- 大谷派における女性史の研究を形にしてほしい。
- ↓ 「女性史に学ぶ学習資料集(仮称)」を企画中。

かまた ひろこ
鎌田 拓子

四国教区東讃第一組高善寺

「女性」住職ってどいふよ?!

子どもの頃、母は私に男の子の服を着させた
がった。古いアルバムに映る私は、どれも緑や
青のパンツを履き、その脇には、ピーターパン
の三輪車が置かれている。母は、私を身ごもつ
た時「大」と男の子の名前を用意して生まれてく
る日々を待ち遠しく思っていたそう。

今より三代前の曾祖父母は子どもに恵まれず、
開業医の四男だった祖父が養子に入り、後に祖
母が嫁入りをした。そして母と叔母が生まれた。
長女だった母に、周りの期待も大きかったのだ
ろう。空襲で焼けた本堂再建に、ご門徒や近所
の方が毎日訪れ、母を大変可愛がってくれたそ
うだが、大事にされればされるほど、自分が男
だったら…と臍を噛むような思いに苛まされ、
婚姻を期に、跡継ぎを生むことがご門徒や寺に
お返しになると信じていた。そうした思いは二
人目の娘、私を授かった後も断ち切れずに、幼
い私のファッションへと映し出されていった。
時を経て、女性も住職に就任できるようにな
り、私は二〇〇五年春に大谷専修学院を卒業し、
住職修習をうけるべく門徒総代の印を揃え書類
を提出した。暫くして教務所員から書類の不受

理の報告があり、前任職と私の関係性の不明が
理由という事だった。前任職とは、姉の夫。私
は前任職の子どもではなく、「たまたま同じ住所
に住む同じ苗字の人」という扱いの為に受理は
難しいとの回答だった。「親子だったらこうなら
ないんですけどね」と彼は小さく呟いた。

ご近所の檀那寺住職の一筆を添えて、ようや
く受理されたが、世襲制の中において、養子だつ
たり女だつたりする事が、世間ばかりでなくシ
ステムの中でもなお隔たりがある事に初めて実
感したのがこの時だった。

こうして始まった法務は、初めて見る「女性」
住職に抵抗感をおぼえたご門徒も少なくはない。
中には「女のお経は聞きたくない」と拒絶され
ることもあったが、それも出会いを重ねること
に理解を得、励ましの声も頂き、今に至っては、
ほぼ周知されていると思ったりする。

「うちの檀那寺は女性住職や」「ああ、あその」と
「女性住職」が代名詞となった会話もあると
聞く。「女性住職」という触れ込みでラジオ局か
ら声がかかり、思うことを喋る機会も頂いて
いる。これも私が女だからという特別扱いの故

かもしれない。

それでも少しずつやりたい事もでき、自他共
に慣れてきたと思うけれど、今でも言われて困
る事がある。それは「結婚しないの?」。その言
葉は配偶者が住職をするか、跡継ぎを作りなさ
いという意味を含んでいたり、もしくはつれあ
いは外で働いてあなたが住職をすればいいとい
う言葉がついてきたりする。

決して夫に坊守を、という声ではない。

夫婦の場合、女性が音頭をとるのは難しいと
いうことを示唆しているのだろう。女の身で住
職の職務を務めつつも、それは世間からすれば
幻想であって現実ではなく、一時の応急処置で
しかないということが伺える。結局、一人で運
営するか退くかの選択肢であって、夫婦揃って
ご門徒と一緒に法義相続するという光景が私に
重なることは人々の中で想像できない。

そうして、私自身も建前や意地を張って独身
を通して住職として生きていくなどと公言して
いることは、母が苛まされた時代や思いとなん
ら変わりが無いことに気づく。

ふと、我にかえって思う。

私は、誰のために、何のために生きてるのだ
ろう。本堂で一人、勤行をしていると阿弥陀經
の一節がぐるぐると頭の中をめぐる。

青色青光 黄色黄光 赤色赤光 白色白光

一人ひとりの尊厳をと如来から願われるこの
ことばは、これからも私の信仰課題になってゆ
くのだと思う。

かかわったばかりに…。

5年前に宗務所のお仕事を辞めて自坊に帰りました。10年ちょっとの職歴でしたが、最後の4年間、女性室の担当を経験しました。それはたいへんな4年間でした。「ジェンダー」「男女共同参画」等、はじめて聞く言葉ばかりなのに、坊守の位置づけや指針1、2(注)の課題の活発な論議に放り込まれ、認識のなさや取り組みの遅さについてたくさんお叱りを受けました。そんな女性室にかかわったばかりに、帰ってからも問題山積です。

■仕事場で

今、保育園のお仕事をしています。長らく女性によって支えられてきた職業のためか、決して保育士の待遇はいいとは言えません。男性保育士が増えないのも、“一家の主”の収入にはふさわしくないことが背景にあると推測します。園の責任者は、長期的な人材育成を泣く泣くあきらめて、人件費負担の少ない若手スタッフ中心の運営を優先せざるをえない状況もあります。

なのに、女性室にかかわったばかりに、「結婚しても続けられる職場に！」などと保育園で出している“えんだより”に書いてしまいます。産休代替職員探しや育児休業取得の手続きも面倒と片付けられません。「子ども大好き！」と昼夜を問わずがんばる保育士の地位向上、なんとかならないものかと悩みます。

■自教区で

宗門の「男女両性で形づくる教団」を目指す方針を受け、教区にも取り組みが始まりました。女性室にかかわったばかりに私もそのスタッフになりました。会議の設定ひとつとっても、教区の仕組みを伝えたり、日程を女性の出やすい時間に設定したり試行錯誤の連続です。最近、教区主催の学習会や女性スタッフ企画の教化事業につながってきましたが、なお、“意

思決定の場”への女性の参画には程遠い感があります。やはり、制度を検討する委員会の設置や、女性の参画に関する具体的な数値を目標としていく取り組みにならないと進まない気がしています。

■我が家で

昨夏、息子が9歳になったのを機に得度を受けました。お寺を継ぐ“〇〇姓を名乗る男子たる教師(寺院規則)”への第一歩と受けとめれば喜ぶべきことなのでしょうが、“お坊さんになる式”ということ以外、その意味を積極的に伝えられませんでした。細かいことですが、今6歳の娘が9歳になった時に、うちの家族は得度受式のことをどう受けとめるか、今から気になっています。女性室にかかわったばかりに、得度式でもいろいろと思いを巡らせています。

おそらく、女性室にかかわることがなかったら、あれこれ考えずに、もっとスムーズにことを運べていたに違いありません。ほんとに人を悩ませる女性室…。かわりを持ってたことを心から喜んでいます。

(注)

- ・指針1「門徒・同朋に開かれた聞法道場としての寺院運営をめざして」
- ・指針2「男女両性で形づくる教団をめざして」
(『あいあう』第17号8頁より)



『あいあう』とは…

この広報誌の名前である『あいあう』は、親鸞聖人によって書かれた『教行信証』（顕浄土真実教行証文類）「行巻」の「今みなまた会して、これ共にあい値えるなり」〔真宗聖典一五九頁〕という言葉から名づけられました。

「遭遇すること難し」とか「遇いがたくして今遇うことを得たり」という言葉もありますが、いずれにしても出遇いのよろこびが表わされているでしょう。

日々の生活にあつて、わたしたちが「生きる」ということを考えたとき、それは、いろいろな人と声をかけあつてこそ「生きる」ということがなりたつていくといつても過言ではありません。しかし、時にその声が届かなかつたり、行き違つたり、そのためにいろいろな出会いはしていないながら、まわりの人を見失っているのではないのでしょうか。

いま、その出会うそのものに出遇いなおすことによつて、自然に向きあうことのできるつながりを回復していきたい。『あいあう』という言葉にはそんな願いがこめられています。

あい、あう、女性室では活動を通してさまざまな出会いを積み重ねていきたいと思えます。

女性室活動報告

【スタッフ派遣】

- 〈2009年〉1月27日 女性室公開講座小松会場 事前スタッフ会への参加
 2月13日 女性室公開講座開催に向けた事前説明のため大阪へ
 2月12日 女性室公開講座小松会場 事前スタッフ会への参加
 2月24日 女性室公開講座鹿児島会場 事前スタッフ会への参加
 3月2日 女性室公開講座小松会場 事前スタッフ会への参加
 3月14日 メンズあいあう取材(名古屋教区 乗西寺)
 3月16日 女性室公開講座小松会場 事前スタッフ会への参加
 3月27日 女性室公開講座鹿児島会場 事前スタッフ会への参加
 5月5日～6日 メンズカウンセラー養成講座への参加
 5月11日 四国教区教化委員会男女共同参画班学習会への参加
 5月26日 女性室公開講座小松会場 事前スタッフ会への参加

【公開講座】

6月6日 小松会場

会場:小松教務所

講師:辛 淑玉さん

テーマ:「あなたと私は違うんや!? 一向き合い 聞き合い 始まる関係―」

6月20日 鹿児島会場

会場:鹿児島別院 大谷会館

講師:園田久子さん

テーマ:「ともに語りあえる関係を願って ―ほんとうに願っている?―」

【第10回女性会議】

4月13日～14日 会場:真宗本願研修道場

講師:加来知之さん

テーマ:「真宗と人権 ―女性教化と五障三従―」

参加者:41名

編集後記

◆『あいあう』第21号の2ページにある「お金にならない育児」の表現について読者からお電話をいただきました。生まれてすぐの赤ちゃんには2～3時間おきの授乳やオムツの交換、少し大きくなれば離乳食作り、排便の仕方を教えるなど、子育てには24時間神経の休まる時がありません。掃除、洗濯、介護も家庭内の誰かが担えば「お金にならない」仕事です。そういう数字には表せない労

働があつてこそ家庭生活は成り立っていますが、ここで問題なのは、①お金にならない仕事を私達がどのように見ているか。②なぜお金にならない仕事を担うのが多くの場合女性なのか。③男性が家事育児をしたい場合、それを支えるような社会システムになっているのか、だと思えます。価値や豊かさとは何か。頂いた電話からそんなことを考えさせられました。(藤場芳子)